

俳句の謎

近代から現代まで

●學燈社●

●俳壇や学界で、論点・争点となっている問題を解明する。

①近代俳句史の謎

②俳人の謎

③名句・秀句・問題句の謎(100句)

〈特別企画〉句作の常識Q & A



俳句の謎

國文學増刊(1996・2)改装版

1999年6月10日 初版発行

編 者 國 文 學 編 集 部

発 行 者 清 水 孝 一

印 刷 所 大盛印刷株式会社

発 行 所

株式会社 學 燈 社

〒169-8608 東京都新宿区西早稲田3-5-10

電話 (03) 5272-2055 振替 00140-0-36253

Printed in Japan

¥1700-

俳句の謎

近代から現代まで

國文學第四十一卷二號改裝版

學燈社

「第二芸術論」五十年

俳句の「ことし」——虚子をめぐって

ことばの視座——俳句の原理

6 大岡 信

10 佐佐木幸綱

13 平井照敏

近代俳句史の謎

■発句と俳句は同じか、ちがうのか ■子規は俳人だったか
■連句はなぜ廃れたか ■俳句とは何か ■写生の謎

17 坪内稔典



謎の俳人

正岡子規	その謎	26	栗津則雄	橋本多佳子	ヴァニティと エクスタシーに触れて	58	上田五千石
河東碧梧桐	「三千里」の旅の目的は 何であつたのか	30	栗田 靖	西東三鬼	三鬼にかかわる 諸説についての私見	62	鈴木六林男
高浜虚子	爛々たり	34	塚本邦雄	中村草田男	難解の霧の中から	66	山下一海
種田山頭火	どう捉えるか	38	金子兜太	山口 誓子	その俳句方法は どのようにして生まれたか	70	松井利彦
飯田蛇笏	表記の問題 「山廬集」の作品を中心に	42	広瀬直人	日野草城	その意義	74	宇多喜代子
原 石鼎	深吉野入山の前後	46	小室善弘	加藤楸邨	細説三題	78	矢島房利
杉田久女	微妙な空気	50	穴井 太	石田波郷	俳句二、三	82	星野麦丘人
水原秋桜子	謎二つ	54	倉橋羊村				

100句

冬蜂の死にどころなく歩きけり
柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺
初暦五月の中に死ぬ日あり
鶏頭の十四五本もありぬべし
赤い椿白い椿と落ちにけり
流れ行く大根の葉の早さかな
爛々と昼の星見え菌生え
帯木に影といふものありにけり
うしろすがたのしぐれてゆくか
うどん供へて、母よ、わたくしもいただきます

村上鬼城
正岡子規
河東碧梧桐
高浜虚子
種田山頭火

高熱の鶴青空に漂へり
蝶塵ちて大音響の結氷期
草二本だけ生へてある 時間
秋灯を明うせよ秋灯を明うせよ
遠慮する人なくさびし避暑に来て
窮乏人に告ぐべきことならず
死ねば野分生きてあしかば争へり
ふくろふに真紅の手毬つかれをり
我去れば鶏頭も去りゆきにけり
夢に舞ふ能美しや冬籠

富沢赤黄男
星野立子
加藤楸邨
松本たかし

謎の句問題句秀名

白日は我が雲なりし落葉かな
駒ヶ嶽凍て、巖を落しけり
入れものが無い両手で受ける
墓のうらに廻る
みちのくの伊達の郡の春田かな
をりとりてはらりとおもきすきかな
誰彼もあらず一天自草の秋
頂上や殊に野菊の吹かれ居り
秋風や模様のちがふ血二つ
短夜や乳ぜり啼く児を須可捨焉乎
足袋つぐやノラともならず教師妻
銚子山ほととぎすおのひかりのみ
冬菊のまとはおのがひかりのみ
謝春星まつりて終に医を嗣がず
紫陽花や水辺の夕餉早きかな
甘草の芽のとびのひとならび
づか／＼と来て踊子にさ／＼やける
雪明り一切経を蔵したる
詩に瘦せて二月渚をゆくはわたり
老いながら椿となつて踊りけり
乳母車夏の怒濤によこむきに
いなびかり北よりすれば北を見る
月の山大国主命かな
出刃を呑むぞと鯨鱗は笑ひけり
天心にして臨見せり春の雁
近海に鯛睡み居る涅槃像
ひらひらと月光降りぬ貝割菜
朴散華即ちしれぬ行方かな
とどまればあたりふゆる蜻蛉かな
外にも出よ触るるばかりに春の月
水枕ガバリと寒い海がある
中年や遠くみのれる夜の桃
秋の喜大魚の骨を海が引く
蟻蜂長子家去る由もなし
獣屍の蛆如何に如何にと口を挙ぐ
真直ぐ往けと白痴が指しぬ秋の道
海に出て木枯帰るところなし
鶴死して翅拡ぐるに任せたり
峯雲の贅肉口ダゲなら削る
をみなとはかかるものかも春の闇

渡辺水巴 97
前田普羅 98
尾崎放哉 98
富安風生 100
飯田蛇笏 102
原 石鼎 104
竹下しづの女 106
杉田久女 108
水原秋桜子 110
高野素十 112
三橋鷹女 114
橋本多佳子 116
阿波野青畝 118
永田耕衣 120
川端茅舎 122
中村汀女 124
西東三鬼 126
中村草田男 130
山口誓子 132
山口誓子 134
日野草城 136

雞頭を三尺離れもの思ふ
女身仏に春剝落のつづきをり
遠蛙酒の器の水を呑む
裏がへる龜思ふべし鳴けるなり
死にたれば人来て大根煮きはじむ
頭の中で白い夏野となつてある
ひるがほのほととぎすよの渚あり
霜の墓抱き起されしとき見たり
雪はしづかにゆたかにはやし屍室
鶏たちにカンナは見えぬかもしれぬ
戦争が廊下の奥に立つてゐた
火を投げし如くに雲や朴の花
花あれば西行の日とおもふべし
蜀葵人の世を過ぎしごとく過ぐ
炎天より備ひとり乗り蛟車羽鳥
はるかまで旅してゐたり昼寝覚
銀行員等朝より螢光す鳥賊のごとく
粉屋が笑く山を駈けおりてきた俺に
霧の村石を投らば父母散らん
天上も淋しからんに燕子花
死は春の空の渚に遊ぶべし
天地の息合ひて激し雪降らす
父母の亡き裏口開いて枯木山
一月の川一月の谷の中
葱抜くや春の不思議な夢のあと
鈴に入る玉こそよけれ春のくれ
戦争と量の上の団扇かな
身をそらす虹の／絶巔／処刑台
耳の五月／嗚乎／嗚乎と／耳鐘は鳴り
鉛筆の遺書ならば忘れ易からむ
音楽漂う岸優しゆく蛇の飢
大雷雨鬱王と会ふあさの夢
音楽を降らしめよ夥しき蝶に
うつくしきあきとあへり能登時雨
「大和」よりヨモツヒラサカスミレサク
栃木にいろいろ雨のたましいもいたり
とりめのぶうめらんこりい子供屋のコリドン
摩天楼より新緑がバセリほど
りや王の墓のどんでん返しかな
万緑や死は一弾を以て足る

細見綾子 147
石川桂郎 148
下村槐太 149
高屋窓秋 150
石田波郷 151
渡辺白泉 152
野見山朱鳥 153
角川源義 154
森 澄雄 155
金子兜太 156
鈴木六林男 157
石原八束 158
野沢節子 159
飯田龍太 160
三橋敏雄 161
高柳重信 162
林田紀音夫 163
赤尾兜子 164
藤田湘子 165
鈴木実 166
阿部寛市 167
加藤都平 168
鷹羽狩行 169
平井照敏 170
上田五千石 171

●執筆者
関森勝夫
室岡和子
本井 英
瓜生鉄二
黒田杏子
辻田克巳
中山純子
足立幸信
畠中 淳
川名 大
鈴木太郎
大串 章
宮坂静生
長谷川權
夏石番矢
筑紫磐井
大槻一郎
(掲載順)

企圖

句作の常識Q&A

基礎篇
實際篇

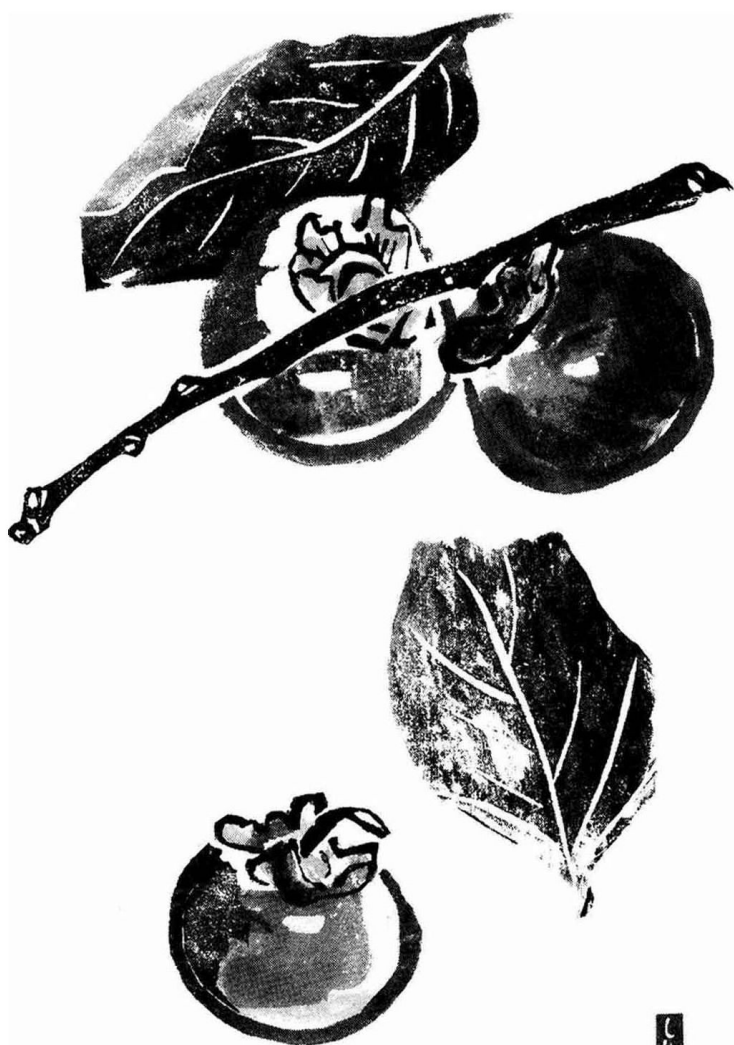
196 187

片山由美子
中原道夫

目次
扉・本文絵
小町谷新子

俳句の謎

近代から現代まで



「第二芸術論」五十年

大岡 信

あれもまたまもなく戦後五十年になる。あれ、というのは、桑原武夫の「第二芸術——現代俳句について」のこと。「世界」昭和二十一年十一月号に発表され、翌年には単行本『第二芸術論』に収められた。それ以外にも、当時比較的活潑に編集されては出ていた年間文芸評論代表選集のたぐいにも、画期的な評論としてくり返し収録されたことを記憶している。この論が当時持ちえた衝撃力に匹敵する批評文は、その後五十年間、俳句文芸の世界ではついに現れなかったと思う。

もちろんそれは必ずしも俳句界が沈滞しているとか、多力者がいないとかいう問題ではない。時代の推移を考慮に入れねばならないことは言うまでもない。

ただ、このごろの俳壇の論調では——と言っても私は詳細にわたることは知らない——ので、むしろこのごろの俳壇内外の空気では、と言うべきところかもしれない——あの第二芸術論、要するに大したことはなかった、という具合に評価が変わってきているのが大勢だとか聞く。

お勇ましいこととは思いますが、もしそういう考えが瀰漫しつつあるのなら、それは随分天気な話じゃなかろうかと思う。第二芸術論は、桑原武夫によって書かれなかったとしても、他の筆者によって、あるいはもっと徹底的な悪意とともに、激烈な否定

論として書かれていたかもしれないと、私は思っている。

短歌について見れば、俳人たちがあれば対岸の火事さ、と言ってすまずわけにはいかないほどの本質的大問題が、当時噴出していたことが、記憶にまだ生々しい。

桑原論文よりも早く、すでに臼井吉見は「短歌への訣別」を宣言していたし、小田切秀雄の「歌の条件」も、咽喉元への匕首だった。この短歌否定論の火は、さらに桑原武夫の「短歌の運命」、小野十三郎の「奴隷の韻律」、福田恒存の「歌よみに与へたき書」などに次々に飛び火し、当時外国のある種の現代詩に心を奪われて、自らも現代詩を書きはじめていた若僧の私のような者でも、決して無関心で通りすぎるわけにはいかない燎原の火が、短歌否定論にはかならなかった。

この打撃につぐ打撃から立ち直るためにこそ、若手や中堅の歌人たちは力を結集したのであって、現代短歌に今なお活力があるとするなら——もちろんあるだろう——それはかなりの程度まで、五十年ほど前のあの一連の苦闘と再建の努力が、遺産となつて生きているのだ。私はそう考えている。

現代の責任感ある歌人たちなら、多かれ少なかれ、当時の短歌否定論の疾風怒濤を、よくぞ凌ぎ得たもの哉、と内心想っていない人はいないだろう。そしてまた、短歌否定論が、いわば逆説的な意味で、時の氏神だったということを、複雑な感慨をこめて思い返している人も、かなりいるだろうと私は考える。

俳句の方はどうだったろうか。事情はかなり違っていたように思われる。一つには、桑原氏の貼りつけた「第二芸術」というレッテルが、ある意味で人々を啞然・茫然とさせるほどに、いわばみごとに極まっていたため、それに反論することさえ野暮ったく見えたということがある。二つには、桑原氏の、いわば社会学的統計によるサ

ンプルの提示が、それなりの強烈な印象を与えると同時に、反面サンプル作りの不徹底さ、不適切さも明らかにあったため、俳人側としては大いに不満であったはずである。したがって、これは要するに垣根の外の素人談義じゃないかというのが一般的な反応となり、少なくとも表面的には、対岸の火事として無視する態度をとることもできたという事情があっただろう。

しかし、桑原氏の投げかけた問題のうち、根本的ないくつかの点については、当時と同様、今でも俳句作者が片時も忘れずに頭のどこかに置いておかねばならないものではなかったか。

とりわけ、俳人の「安易な創作態度」と「作家の思想的無自覚」を、二にして一である問題として指摘している点は、俳句という短詩型文学の「形式」とも深く結びついた問題だけに、時代を越えて、鋭い切尖を俳句の心臓部に突きつけ続けていると思う。

桑原説が、結論として、「人生そのものが近代化しつつある以上、いまの現実的人生は俳句には入り得ない」がゆえに、芸術の名に値しない、強いて名づけるなら第二芸術だろう、とのべている点に関しては、実作による反論はたくさんあり得る。少なくとも現実的人生を俳句で詠み得ている人々は、無数にいると言ってもいい。俳句は決して、桑原説にいうような「風雅の隠者」の専有物ではなくなっている。

そこには、さすがに五十年間の現代俳句の歩みがあった。だが、それだからと言って、第二芸術論は結局大したものではなかった、と人が見なすなら、その瞬間から、崩壊現象がその人の内部で起こるだろう。

言うまでもなく、俳人たちによる第二芸術論への反論は、当時たくさん書かれた。

しかし短歌の場合とは違って、意外なことに、傷は必ずしも深傷であったとは言えないように私には思われる。短歌の場合は、斎藤茂吉一人の去就をめぐってだけでも、ほとんど惨たる光景を呈した。

私にはむしろ、俳人よりも一人の俳句思想家の方が、第二芸術論の問題をずっと深くでとらえ、反論も用意し得ていたように思われてならない。すなわち山本健吉。

山本健吉の『純粹俳句』（昭二七・一九五二年刊）は、私の見るところでは、第二次大戦前後の危機的な時代に、現代俳句自身が遭遇していた危機に対する、本質的な回答として書かれた論文集である。その危機とは、第一には昭和十年代の新興俳句の出現、第二には「第二芸術論」の衝撃である。両者とも、俳句の根源的な存在理由に対する問いを含んでいた。『純粹俳句』の題名の示す通り、この本は、俳句が純粹に俳句であるための「固有の方法」を論じ、「滑稽・挨拶・即興」の三つの命題を提唱し、また、切字の問題、発句の対話性的問題についても、周到に論じていた。

私はたまたま角川書店から発刊されたばかりの『俳文学大辞典』で、『純粹俳句』についての項目を担当したが、山本健吉の「俳句批評家」としての輝かしい出発点となったこの本の価値は、今になっても減じるどころか、ますます高いものになっていると思う。なぜなら、『純粹俳句』は、「第二芸術論を好機として生れたすぐれた反対提案の書だが、同時に現代の俳人に投げかけられた刺激的な現代俳句批判の書ともなっている」（同書拙文）からである。

「第二芸術論」に対して、去年の雪今いずこ、とだけ考え、風馬牛の態度をとり続ける人がいたら、ある意味ではいかにも「俳人」らしいと感心もするが、その人は「現代俳人」とは、本当は言えないのではなからうか、とも思う。

俳句の「ごとし」

——虚子をめぐって——

佐佐木幸綱

高浜虚子には、「ごとし」を使った名句が多い。

たとふれば独楽のはじける如くなり

旗のごとなびく冬日をふと見たり

初蝶を夢の如くに見失ふ

大寒の埃の如く人死ぬる

まつしぐら炉にとび込みし如くなり

去年今年貫く棒の如きもの

なぜ、高浜虚子の「ごとし」が気になるのかを最初に説明しておいたほうがいいだろう。じつは、昨年、私は、杉山康彦・林巨樹両氏と共編で『日本歌語事典』という本を刊行した。古典から現代までの短歌の用語を集めた事典である。できあがった本をおりおり自分で使いながら、いくつかの点に気づいた。そのうちの一点が、「ごとし」にかかわるものだったのである。同事典には、「ごと」「ごとし」の用例が合わせて十首しかあがっていない。少なすぎるのではないか。

ずっとこの点が気になってきた。同事典に出ていない近代・現代短歌の用例として、その後、へやはらかに柳あをめる／北上の岸辺目に見ゆ／泣けとごとくに／石川啄木、へ君かへす朝の鋪石さくさくと雪よ林檎の香のごとくふれ／北原白秋、へ少年は少年とねむるうす青き水仙の葉のご

とくならびてゝ葛原妙子などに気づいたが、実際問題としては、「ごとし」は短歌史にはあまり深くかわらなかった語のようである。

そういう目で俳句界をながめて見ると、これもじつは、思ったほど「ごとし」を含む名句を生んでいるわけではないらしい。

冬の浅間は胸を張れよと父のごと

加藤楸邨

蓮池にて骨のごときを掴み出す

西東三鬼

葡萄食ふ一語一語の如くにて

中村草田男

こうした用例をはじめ、もちろん何句かが思い浮かぶが、そのつもりになって句集類をめぐってみると、あんがい実際の用例は少ないようである。虚子はそうした中で、やはり目立つ。名句が多いから、なお、目立つのである。

きわめつけは、『六百句』中の次の作だ。

十月二十日。虹立つ。虹の橋かゝ

りたらば渡りて鎌倉に行かんとい

ひし三国の愛子におくる。

虹立ちて忽ち君の在る如し

虹消えて忽ち君の無き如し

「愛子」というのは、福井県三国に住む虚子の弟子である。虚子が三国に行ったとき、愛子は母と愛人の柏翠といっしょに敦賀まで送ってきた。その車中で虹を見たのである。このときのできごとは、小説『虹』にくわしい。虹を見て愛子は、「あの虹の橋を渡つて鎌倉へ行くことにしませう……」とひとり言のように言った。その後、虚子が当時住んでいた小諸でのこと、浅間山にかけてすばらしい虹が立ったことがあった。虚子は、引用の二句ほか一句を葉書に書いて、愛

子に送ったのだった。

愛子と柏翠、薄幸な若い二人の生と死は、虚子にふかい感銘を与えたい。『虹』のほか、『愛居』『音楽は尚ほ続きをり』『小説は尚ほ続きをり』等にも、愛子と柏翠のことは書かれている。二人とも肺結核にかかっており、そのため結婚しないでいたのだが、やがて愛子は死んでしまう。「最後に、『先生におよろしく』と云ひのこして逝つたとのことです。木彫の観音像があり、それにのりうつるんだ、といつて、その像を凄じ顔をしてにらんでゐたさうです。この観音様を信仰する者は、必ず咳を治してみせるといつたさうです」(『音楽は尚ほ続きをり』)。

「ごとし」は、ふつう、三種の用法が指摘される。①他の事物に類似していることを示す。②物事の例を示して他を類推させる。③不確実な断定を表す。

一般的には①の用例が多く、虚子にあつても「去年今年貫く棒の如きもの」などはそれに当たる。しかし、虚子の「ごとし」のなかには②があつて、あるいは②のように他を類推させ、読み手の心を別の場所に誘う「ごとし」が見られて、その点に注目するのである。この愛子に送った二句は②の典型的な例と見るべきだろう。「君の在る如し」とは「在る」という事例を示して「無い」状態を類推させているわけだし、「君の無き如し」は逆に「在る」状態を類推・幻想させる例である。つまり、身も蓋もない言い方をすれば、「在る如し」とは「無い」の裏返し、「無き如し」は「在る」の裏返しであるそのことを、愛子の切ない生と重ねたのがこの二句なのであった。

思えば、俳句という短い形式が詩として成立するには、読み手の心を別の場所に誘う強い力が要求されるわけで、その点を強く意識していたにちがいない虚子が、「ごとし」という語に強い関心をもっていただろことは当然だったような気がしてくるのである。

ことばの視座

俳句の原理

平井照敏

一 俳句の短かさや沈黙、定型や季語などと、俳句に切りこむ視座はいろいろにありうるが、そのもとも根源的なものは何かと問えば、私はそれが、俳句はことばで作るところに帰するのではないかと思う。そして、俳句はことばの構造体による、詩（俳）の発生装置であると私は思う。ことばが、俳句のよって立つ唯一の根拠なのだから、ことばをよく知り、ことばを尊重し、ことばから考えてゆかねばならない。このような立場を、「ことばの味方」と私は名づけている。

この私の立場をよく示す一例として、芭蕉の「田一枚植て立去る柳かな」の句をあげておこう。この句、従来、主語を補って解釈することがおこなわれ、早乙女や芭蕉を主語にあてはめて理解されている。一般的には、早乙女が田一枚を植えおえ、休んでいた芭蕉が柳のもとを立去っていったものとされている。早乙女が植えて立去ることも、さらには芭蕉が植えて立去ることさえも考えられていておどろく。

私はそれらの解に対し、柳が田を植えて立去るのだと考えている。この柳は古来遊行柳と呼ばれ、謡曲で知られている名木である。謡曲では、柳の木の下で遊行上人が一夜をあかしていると、柳の翁があらわれ、いろいろと苦患を訴える。仏の教えを説いてやると、報謝の舞いを舞って、一陣の風とともに翁は立去ってゆくのである。したがって、田一枚植えて立去ってゆく柳であるよ、とも、この柳は田一枚植えて立去った柳であるよ、とも解釈できるのである。この解をナンセンスというなかれ。ことばのさし示すままに読んでみた解なのである。そしてそれは夢幻能の世界ではごく自然なことではなかったか。ことばのえがき出すも

のをねじまげてはならない。ことばを尊重してゆかねばならないのである。

二 私 は近代の俳句史を、俳と詩の二因子の交替によって考えている。俳は旧ともおきかえられ、守旧をあらわし、詩は新、革新をあらわす。子規・碧梧桐の新、虚子の旧、秋桜子の新と順調に説明できるが、現代に近づくにつれて複雑さを増し、人間探求派は、草田男の新、楸邨の総合（人間）、波郷の旧をはらみながら、全体としては新に寄っていた。以後、昭和三、四十年代詩に急進、五十年代以後は俳が復権しながら、平成にはまた徐々に詩にすすみはじめてゆく。ただし平成の俳句は、ことば本位という形をとっての詩で、すこぶる軽薄短小の感を与えている。ことばの実の回復が説かれるのも、こうした傾向への批判ともいえるか。

もっともことばは、実だけを説くのでは片手落ちで、虚をあわせ考えねば十分ではないと思う。芭蕉は「虚に居て実をおこなふべし」と述べたが、芭蕉の用例における虚は、自分の考え、一つの宇宙観、人生観のこと、実はものの実際、現実感^{リアリティ}をあらわす。『おくのほそ道』も、大きな無常観、流転観の根柢の上に、旅の門出や道中の細部の現実を書きつけていった。現代の作家では、森澄雄にもっともことばの虚実が感じられる。「妻亡くて道に出てをり春の暮」という句、ひろびろとひろがる思いの上に、形姿がくつきりと見えている。

三 長年、句作にかかわってきて、不思議に思うことがある。それは、佳句の出来たときを思うと、苦勞した思い出が全くないことである。佳句はいわばさらさらと天降るかのようにして成ってしまったのである。もっとも、ずっと句を作りつづけて、いわば詩の空中にうかんでいた時、ふっと現れた一語が他の十数音をさそい出してしまったのである。ほとんどそれは自動筆記であった。そして一句がうまれてしまったあとの気持はたのしかった。どんな句かといえばそれらは、

リヤ王の墓のどんでん返しかな

金木犀の香の中の一昇天者

死顔が満月になるまで歩く

など。第一句は、「リヤ王」とうかんだらすらすらと続き、第二句は同時刻の死者の死を予言しており、第三句は大切な人の死にことばが応えたものであった。

四 水原秋桜子は、芭蕉の俳句を伊賀の七度焼きに、蕪村の俳句を白磁の一度焼きにたとえていた。数学者俳人吉田洋一が、芭蕉の秀句はよい句（悲壮感のある絶唱）だが僅か、蕪村の秀句はおもしろい句で多数と述べていたことが思いあわされる。これは芭蕉の句が人生や思想や古典などさまざまなものの奇蹟的合成体で、それゆえ人のところをつよく打ち、蕪村の句は純粹なことばで、文芸的に効果的に働いておもしろさがかもし出すからであろう。

ことば本位の句がさかんになれば、芭蕉のような句は捨て去られて、おもしろさだけの句が選びとられるようになるのか。人間探求派的な感動は、重すぎる過去の遺物となるのだろうか。漱石の句で、「葦ほどな小さき人に生れたし」（明30）と「腸に春滴るや粥の味」（明43）とでは、おもしろさと絶唱の典型的な対照となるだろうが、後句は前句とは比べものにならぬ生死の大事を背負っており、深い感慨を反映して、圧倒的な感動を与える。ことばは背負うものが多ければ多いほど大きな迫力を持ち、空想のおもしろさなど足もとにも寄せつけぬ力をもつのである。それがことばのもつ性質なのである。

五 ミニマル・アートという芸術がある。逐語訳すれば最小の芸術、現在世界的に追求されている芸術の一領域である。要点をいえば、自然物にすこしだけ手を加え、主張とか詩とか芸術性とかがうまれはじめる、その瞬間を提示しているものだ。木の箱の底に直観と鉛筆で書いてあるだけのヨーゼフ・ボイスの作品を見て感動し、私は即座に軽みのことを思いあわせた。さらっと句を作りたい。ごてごてした、もってまわった句はもうたくさんである。ただ句を読んで、最小限でよい、詩（俳）の発生する現場に立ち会いたいのである。川崎展宏の「一葉忌とはこんなにも暖かな」でよいのである。さりげない句は平明単純だ。森澄雄の「妻がゐる夜長を言へりさう思ふ」でよいのである。平明単純でありながら、どこからか詩（俳）を発生さ